

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和2（2020）年度 実施報告書

2021 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業とその他の資金による令和2（2020）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を2つの柱として、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、他大学と連携したワークショップ、シンポジウム・公開講演会、幼児教育分野の人材育成のための研修等に取り組んでいます。また、「共に生きる」スタディグループを通じた、学生による自主活動を展開してきています。

本学は、2002年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んできており、今年度も絵本・図書館活動支援を実施する等、継続的なアフガニスタン女子教育支援に取り組みました。

また、国際社会において議論・実践が進んでいる「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」を重視し、平成29（2017）年度から学内連続公開講座を開催しています。今年度は、途上国での子どもの教育支援に関するNGOの取り組みやSDGs達成に向けた自治体、民間企業での取り組みをテーマに有識者を招聘し、セミナーを開催しました。また、関連授業科目でもSDGsを積極的に取り上げてきています。

他方、今年度は新型コロナウイルスの影響で、一部の活動が中止あるいはオンライン対応を余儀なくされる等制約も多々ありました。

かかる状況下においても、上記の通り相応の成果を上げることができた点につき、本事業の実施にご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。今後もこれまでの活動で得た平和構築と途上国の社会経済開発のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用して更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

2021年3月

国立大学法人お茶の水女子大学
グローバル協力センター長 棚橋 訓

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和2（2020）年度 実施報告書目次

はじめに	ページ
I. 事業の概要	1
II. 令和2（2020）年度の活動の概要	5
1. 活動の概要	7
2. 各活動の概要	7
III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成	9
1. センター教員担当の授業・セミナー	11
1. 1 全学共通科目「平和と共生演習」「『平和と共生』実践演習」	11
1. 2 グローバル文化学環「国際協力特論」	11
1. 3 大学の世界展開力強化事業・COIL 授業	14
1. 4 学内公開連続講座「持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」	15
2. 海外調査支援	18
3. 「共に生きる」スタディグループの活動	21
3. 1 学生自主活動	21
IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）	23
1. アフガニスタン女性教員・研究者の短期研修（野々山基金）	25
2. アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト）	27
3. アフガニスタンへの絵本寄贈（野々山基金）	28
4. 乳幼児ケアと就学前教育研修（国際協力機構（JICA）課題別研修）	30
5. 社団法人日本アフガニスタン協会から附属中学校へのサッカーボール寄贈	32
V. その他	33
1. グローバル協力センター図書室利用状況	35
2. 情報発信	36

I．事業の概要

I. 事業の概要

【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」

【事業期間】

平成 22（2010）年度から令和 2（2020）年度

平成 22（2010）年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23（2011）年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センター

【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第 2 期中期目標・計画前文）。さらに、世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によ

って傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられている。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

II. 令和 2（2020）年度の活動

II. 令和 2（2020）年度の活動

1. 活動の概要

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を 2 つの柱としてきている。しかしながら今年度は、新型コロナウイルスの世界的蔓延の影響を受け、1 つ目の柱として想定していた、「国際共生社会論実習」（開発途上国スタディツアー）の一部授業、海外調査支援、大学間連携イベントの実施に至らなかった。他方、2 つ目の柱については、アフガニスタン女性教員等短期研修、アフリカ・中東向け「乳幼児ケアと就学前研修」等をオンライン対応も含め実施した他、「共に生きる」スタディグループを通じて、学生による自主活動も展開した。

本学は、2002 年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んできているが、今年度も、絵本・図書館活動支援（野々山基金）を実施し、継続的なアフガニスタン女子教育支援を行った。

また、国際社会において議論・実践が進んでいる「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs）」を取り上げ、平成 29（2017）年度から学内連続公開講座を開催しているが、今年度は、途上国での子どもの教育支援に関する NGO の取り組みや SDGs 達成に向けた自治体、民間企業での取り組みをテーマに有識者を招聘し、セミナーを開催した。

2. 各活動の概要

（1）国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

1）全学共通科目「平和と共生演習」において、SDGs で取り上げる貧困・格差、食料、平和構築、難民、保健等について、プレゼンテーション、議論を通じて、こうした開発課題についての国内外の状況を理解し、現場の視点で考える機会を提供した。

グローバル文化学環「国際協力特論」において、途上国の社会経済の問題と国際協力について、ベトナム、中国、アフガニスタンの国別実情や、自治体・企業・NGO との連携具体事例を紹介しつつ、講義や議論を通じて、考察を深める機会とした。また、Collaborative Online International Learning (COIL) 授業を通じて、コロナ禍の下での子ども教育につき日米の他大学学生との議論を深めた。

2）「共に生きる」スタディグループを通じて、学生の自主活動を支援した。

(2) 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

1) アフガニスタン女子教育支援の一環として、過去に野々山基金プログラムで来日したアフガニスタン女性教員・研究者との初の意見交換会をオンライン・ベースで行った。

2) 「アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト」（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト）において、現地政府関係者との意見交換会をオンライン・ベースで行った。

3) 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会との連携により、アフガニスタンにおける絵本作成配付・図書館事業を支援した。

4) 乳幼児の保護と教育の観点から、国際的にニーズが高まっている幼児教育分野の人材育成のため、アフリカ・中東の 6 か国の行政官、視学官、指導主事等を対象に「乳幼児ケアと就学前教育研修」（国際協力機構（JICA）課題別研修）をオンライン・ベースで実施した。

III. 国際的な課題に関する教育・研究、
これらを通じた同課題に取り組む
女性リーダーの育成

Ⅲ. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

1. センター教員担当の授業・セミナー

1. 1 全学共通科目「平和と共生演習」「『平和と共生』実践演習」

2015 年 9 月の国連総会で、今後の国際社会、また開発途上国、先進国を含む各国の社会の方向性を考えるためのマイルストーンである「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)」が採択された。同アジェンダ・目標は、「貧困の撲滅」を中心的な課題に据え、「飢饉の終焉」「健康な生活」「包摂的かつ質の高い教育」「ジェンダー平等」「各国内及び各国間の不平等の是正」「平和で包摂的な社会」等 17 の目標に掲げている。

本授業では、SDGs が取り上げる以下のテーマについて、現場の状況を理解するための文献・資料を取り上げ、それぞれのテーマがどのように捉えられているのか、また、それぞれのテーマ同士がどう関係しているのかについて議論を通じて考察を深めた。また、援助を含め、どのような対応が可能なのかについても、ケーススタディを通じて議論を行った。

特に現場の視点を持って考えていくことを重視し、以下のような現場の声を聴く機会も設けた。

日時：2020 年 10 月 27 日（火） 15:00～16:30

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館

テーマ：「難民や移民の生活実態、女性の権利や活躍：

アフガニスタンを事例として」

講師：

1. 2 グローバル文化学環「国際協力特論」

現在、貧困や格差の問題は、途上国にとどまらず、日本において、また、世界的な課題となっている。本授業では、貧困・格差等国際協力上の開発課題や新たな援助体制・協力手法を総論として取り上げつつ、中国、ベトナム等の個別国・地域事例、さらには民間企業、自治体、NGO 等多様なパートナーとの連携の在り方について理解を深め、全体を俯瞰する視座が養われるよう試みた。これらの課題についての途上国に関するいくつかの文献を取り上げ、講義、文献講読、プレゼンテーション、議論を通じて、途上国の直面する開発課題に

ついて理解を深めるとともに、日本の問題とも共通する、その背景や構造的な要因にも目を向けた。また、可能な限り、政府施策や ODA プロジェクト等の現場事例を紹介することで、理論と実務双方の検討、相互関係の考察を試みた。

なお、以下の通り、途上国の現場で活躍する専門家から、直接話を聞く機会も積極的に設けた。

(1) 日時：2020 年 11 月 16 日 (月) 13:20～
14:50

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館

テーマ：「ベトナム技能実習生の現状と課題
ベトナム人の理解から見えること」

講師：ESUHAI 社 清水寛子 社長補佐、
ホワン・ゴック・マイ・チー シニアコンサル
タント



講師の清水氏 (左)、ホワン氏

(2) 日時：2020 年 11 月 30 日 (月) 13:20～14:50

場所：オンライン

テーマ：「中国の対外経済政策（一帯一路）と対中援助」

講師：JICA 東・中央アジア部長 中里太治氏

(3) 日時：2020 年 12 月 7 日 (月) 13:20～14:50

場所：オンライン

テーマ：「アフガニスタンでの子どもの教育支援について」

講師：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) 山本英里氏 (事務局長
アフガニスタン事務所所長)、ワヒド・ザマニ氏 (アフガニスタン事務所所長代
行)

(4) 日時：2020 年 12 月 21 日 (月) 13:20～14:50

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館

テーマ：「東南アジアで咲く道の駅 ベトナムでの事業実施の経験から」

講師：株式会社ちば南房総 代表取締役副社長 加藤文男氏

(5) 日時：2020 年 1 月 18 日 (月) 13:20～14:50

場所：オンライン

テーマ：「SDGs・ESG× 風の時代：国際協力に関わるコンサルタントの視点から」

講師：日本工営株式会社 環境技術部 SDGs CSR 戦略ユニット長 菊池淳子氏

※上記(3)、(4)、(5)の授業はグローバル協力センター主催「持続可能な開発目標(SDGs)セミナー」との共催で開催された。(詳しくは、「1. 4」参照)

以上のような多角的な情報と考察は、貧困・格差等の開発課題、国際協力の多様な担い手について現場に根差した理解につながったものとする。

1. 3 大学の世界展開力強化事業・COIL 授業

今年度も昨年度同様、日米の他大学の学生との議論を深めるため、Collaborative Online International Learning (COIL) 授業を「国際協力特論」に組み込んで実施した。COIL 授業の概要は以下の通り。

(1) COIL 授業の実施概要

1) 実施日時

○日時：2020 年 10 月 30 日（金）8:30～9:15

※L.A. Time：10 月 29 日（木）16:30～17:15

○参加大学：Loyola Marymount University (LMU)、上智大学、お茶の水女子大学



本学学生によるプレゼンテーション

2) 開催方法・参加者数

○開催形式：Zoom によるオンライン開催

○参加者数：43 名

- ・Loyola Marymount University：Bernadette Musetti 教授、セミナー参加学生 17 名、計 18 名
- ・上智大学：小松太郎教授（グローバル教育センター長）、院生（ファシリテーター）3 名、セミナー参加学生 10 名、計 14 名
- ・お茶の水女子大学：小中铁雄特任教授（グローバル協力センター副センター長）、国際協力特論受講生 10 名、計 11 名

3) セッションの進め方

○目的：パンデミックの危機が大学での学習や、それぞれの国や開発途上国の困難な状況にある人たちへ与える影響について、自分たちの経験や見解を共有すること。

○形式：お茶の水女子大学の参加学生代表によるプレゼンテーション（タイトル：「カンボジアにおける教育の問題とその解決策」）の後、グループディスカッションを行う。

4) グループディスカッション

学生は予め設定された以下のテーマ・リードクエスチョンを踏まえ、6 グループに分かれて議論した。

○テーマ 1：パンデミックは、資源が非常に限られている開発途上国の人々の教育へのアクセスや教育の質にどのような影響を与えましたか？

短いビデオ（World Vision (NGO) によるヨルダンのシリア難民への教育支援について

て) やインターネットなどで見つけた資料について、あなたの考えを共有してください。

“How has the pandemic affected the access to and the quality of education for those in the developing world where resources are very limited? Please share your reflection on the short video (about education for Syrian refugees in Jordan) and other materials you have found on the Internet etc.”

○テーマ2：なぜ私たちは途上国の教育へのアクセスと質を気にする必要があるのでしょうか？ 私たちに何ができるのでしょうか？ 何か革新的なアイデアはありますか？

“Why do we need to care about the access and quality of education in the developing world? What can we do about it? Any innovative ideas?”

(2) COIL 授業の成果

短い時間ではあったが、参加学生は与えられたテーマに沿って、自分の意見を英語で人に伝わるように話す良い機会となった（昨年度はフェイスブックへのコメント書き込みが主体であったが、今年度はオンラインでの直接討議となり難易度は上昇）。テーマ自体も現下のパンデミックによる教育の状況という時宜を得たもので学生の関心も高かったものと考えられる。（授業実施後に行った学生アンケートでは、総合的な満足度について 9 割の学生が「大変満足」「満足」との回答であった。） スケジュールの関係上、本学は2回目のみの参加となったが、冒頭で昨年のスタディツアーを踏まえた内容でのプレゼン機会を得たことで、その後の意見交換の素材提供として一定の貢献もできた。

1. 4 学内公開連続講座「持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」

本講座は、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業の一環として、平成 29（2017）年度より実施してきているもので、今年度は以下の通り計 3 回開催した。今年度は特に SDGs のゴール 17 に着目し、NGO、地方自治体、民間企業といった多様なアクターからの登壇を得た。「国際協力特論」授業へ組み込んで実施したが、学生からは毎回活発な質問が寄せられ、また事後のアンケート結果でも満足度は高かった。第 9 回（2021 年 1 月 18 日）実施分は生活科学部のファカルティ・デベロップメントの一環として認定されたため、同学部を含め多くの教職員の参加を得た。

（第 8 回）

日時：2020 年 12 月 7 日（月） 13:20～14:50

場所：オンライン

テーマ：「アフガニスタンでの子どもの教育支援について」



講師の山本氏（写真左）

て」

講師：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA） 山本英里氏（事務局長兼アフガニスタン事務所所長）、
（アフガニスタン事務所所長代行）

・SVA はアジア 6 カ国 7 地域で主に教育文化支援事業、緊急救援支援事業を中心に活動を実施、全ての活動は開始時期から行政、現地の住民の方々などへの研修を織り込みながら事業・活動が終了した後も継続して事業を担っていけるよう配慮している。SVA 現地事務所からは、アフガニスタンでも新型コロナウイルスの影響に苦しむ中、図書館活動としては、9 月からカブール、ナンガハル、ラグマンの計 16 校で移動図書館活動を再開、また全国で毎日放送されている教育省のラジオ番組と、ジャララバードの民間のラジオ番組で各週に 3 日、約 20 分間これまで出版した絵本の読み聞かせキャンペーンなどを開始しているとの報告があった。

（第 9 回）

日時：2020 年 12 月 21 日（月） 13:20～14:50

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館

テーマ：「東南アジアで咲く道の駅 ベトナムでの事業実施の経験から」

講師：株式会社ちば南房総 代表取締役副社長 加藤文男氏



講師の加藤氏

・南房総市の道の駅「枇杷倶楽部」の創設・運営の歴史、多方面での工夫（農産品加工を通じた地域振興、広域連携を促すエコ・ミュージアム、防災機能等）を振り返りつつ、日本発祥の「道の駅（MICHINOEKI）」モデルをベトナム等途上国に移転していく際の意義・留意点につき 20 年超の海外協力経験を基に紹介。学生は、自身の地元でも見かける「道の駅」が国際展開されている点、日本の地方の「顔が見える」協力の有用性に高い関心（事後アンケートでは 92%が満足）をもった。

（第 10 回）

日時：2021 年 1 月 18 日（月） 13:20～14:50

場所：オンライン

テーマ：「SDGs・ESG × 風の時代：国際協力に関わるコンサルタントの視点から」

講師：日本工営株式会社 環境技術部 SDG s CSR 戦略ユニット長 菊池淳子氏

・世界には SDGs 達成に向けて膨大な需要がある中、①17 のゴールはそれぞれが関連し合っているため、一企業や一組織、一つの国が単独で取り組むのではなく、ネットワークを形

成して協働して進めていく必要があること、②民間企業にとっても、**SDGs**に取り組むことは企業の評価や顧客満足度の向上、リスク回避、さらには **ESG** 投資や市民社会から選ばれる企業になれる等紹介。**SDGs**、**ESG** という時事的テーマでもあり、学生の満足度も高かった（事後アンケートでは満足度 100%）。



講師の菊池氏（写真右）

2. 海外調査支援

(1) 実施概要

1) 目的

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業の一環として、本学大学院博士課程（前期・後期）学生による途上国研究、国際協力に関する現場に根ざした調査研究を支援するため、公募により選定された海外調査への支援を行う。

本事業は、以下の2つからなる。

- ①「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業の一環として、平成23年度から実施している海外調査支援。
- ②平成24年、卒業生故野々山恵美子様の遺贈により、アフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国を対象とした調査、研究、実践のために設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」により平成25年度より実施している開発途上国における女子教育分野の海外調査支援。

2) 対象分野

- ①国連・持続可能な開発目標の17ゴールに関連するテーマ（「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」）
2015年9月に国連で採択された先進国、開発途上国を含む普遍的な政策目標である「持続可能な開発のための2030アジェンダ・持続可能な開発目標」（2030 Agenda for Sustainable Development・Sustainable Development Goals : SDGs）の17ゴール（以下）のいずれかに関連するテーマ。

ゴール1. 貧困撲滅	ゴール10. 各国内及び各国間の不平等是正
ゴール2. 飢餓の終焉・栄養改善	ゴール11. 包摂的かつ持続可能な都市及び人間居住
ゴール3. 健康な生活	ゴール12. 持続可能な生産消費形態
ゴール4. 包摂的かつ質の高い教育	ゴール13. 気候変動の軽減
ゴール5. ジェンダー平等・女性女児の能力強化	ゴール14. 海洋保全
ゴール6. 水と衛生	ゴール15. 持続可能な森林管理、砂漠化への対処、生物多様性保全
ゴール7. 持続可能なエネルギー	ゴール16. 平和で包摂的な社会の促進
ゴール8. 包摂的かつ持続可能な経済成長・人間らしい雇用	ゴール17. パートナーシップの強化
ゴール9. 強靱なインフラ・包摂的かつ持続可能な産業化	

- ②開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ（野々山基金）

3) 支援内容

20 万円を上限として、航空運賃、ビザ代、予防接種代、海外の調査地での宿泊費、その他センターが必要と認める費用を本学およびグローバル協力センターの規定により支給する。これらの費用の総額が 20 万円未満の場合は実費、20 万円以上の場合は 20 万円を支給する。

また、本年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、海外渡航が困難な状況であることを考慮して、国内で活動している国際協力団体へのヒアリング調査、インターネットを活用したオンライン学術調査や研究交流等の研究実践を含む研究計画の申請も受け付けることとした。

4) 募集期間：2020 年 10 月 14 日（水）～11 月 2 日（月）

本年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、春募集（5 月）を中止し、秋募集（10 月）のみ実施した。

5) 募集結果

「持続可能な開発目標の 17 ゴールに関連するテーマ」

「開発途上国の女子教育、基礎教育、ノンフォーマル教育に関連するテーマ」

いずれも応募者なし。

※本募集に先立ち、センターホームページにて、海外調査支援に関する意見・要望を募ったが、学生からの投稿はなかった。



図1：意見募集のページ

(2) 今後の対応

来年度については、新型コロナウイルス感染症の状況を精査しつつ、本年度同様に実施時期を変更する、国内でのヒアリング調査やインターネットを活用した調査を支援するなど、可能な限り実施できるよう柔軟に方法を探っていく。

あわせて、従来押印を求めていた申請書類等については政府方針等に沿い書式の見直しを行う予定である。

3. 「共に生きる」スタディグループの活動

「共に生きる」スタディグループとはグローバル協力センターがその活動を支援する、国際協力や平和構築に関心を持ち「共に生きる」社会について自主的に学習・活動する学生のグループで、センターやメンバー有志が企画したイベントや勉強会にそれぞれの関心に応じて参加することができる。これらの学生企画イベントの案内、センター企画のイベントの案内および、国際機関、NPO 等のセミナー・イベント情報等についてはメーリングリスト（登録メンバー数は156名）にて発信している。今年度は、67件の情報配信を行った。学生自主企画については、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で制約を受けることとなったが、STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部はコロナ禍でも工夫して活動を行った。以下、学生が作成した活動に関するホームページ記事を掲載する。

3. 1 学生自主活動

「STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2020 年度活動報告」

私たちは、「勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界に」「大学の教科書をより安価に購入できることが当たり前前の世界に」という理念のもと、大学生から使わなくなった教科書・書籍を寄付していただき、それを約半額で再販売し、得た収益をラオスとバングラデシュの子どもたちの教育支援に寄付をするという活動をしています。



オンラインミーティングの様子

2012 年より、「共に生きる」スタディグループの一員として学内での活動をしております。現在は1～4年生合計18人で活動を展開しております。今年度は支部の目標に「伝える・繋ぐ・楽しむ」を掲げ、お茶大生にSTUDY FOR TWOの活動を知っていただき、お茶大生と途上国の子どもたちを繋げることで、そして私たちが楽しみながら活動すること



オンライン販売の様子

を目指しました。また、新型コロナウイルスの影響により、活動が思うように行かない部分も多くありました。下向きの気持ちではなく、これを機に今までとは違った活動の仕方を考えて発展させてみようという前向きの気持ちで活動してまいりました。

私たちは、学生の皆様に、いらなくなった教科書・書籍を学内と学生寮の合計 7

か所に設置しているボックスへ入れていただく形で、教科書・書籍を寄付していただいています。例年では、4月と10月の学期初めに2週間ずつ、中古教科書・書籍の販売イベントを附属図書館前で行い、11月の微音祭では、これまでに寄付していただいた本のうちの教科書以外の読み物を、フリーマーケットのブースで販売しておりました。しかしながら、今年度は新型コロナウイルスの関係により、オンライン・郵送による秋販売のみとなりました。今までとは違った販売形態となり、支部員も手探り状態ではありましたが、たくさんの方にご協力いただき、今年度の合計寄付金額は44,100円となりました。

教科書・書籍の寄付、購入をしてくださったお茶大生の皆様、またご協力いただきました全ての方に感謝申し上げます。今後もお茶大生に身近な国際協力場を提供すること、長期的に途上国の子どもたちを支援することを目指し、支部員一同頑張ってまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

(STUDY FOR TWO お茶大支部代表 2年 山谷咲月、大谷理香)

IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に 関する支援事業（教育・研究成果の 国際社会への還元）

IV. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

1. アフガニスタン女性教員・研究者の短期研修との意見交換会（野々山基金）

（1）概要

本事業は、アフガニスタン女子教育支援の継続とネットワークの維持、アフガニスタン女性研究者の研究・実務レベルの向上を目的に平成 24（2012）年度より実施しており、これまで、8 年間にわたって、計 16 名を受け入れている。こうした取り組みは、国費留学生のフォローアップの役割を果たすとともに、留学生候補者の発掘・準備にもつながっている。これまで、6 名がフォローアップ（うち 2 名は元奈良女留学生）、2 名が留学前研修で参加し、現在 1 名が 2021 年より JICA PEACE プログラムで留学が決定しており、1 名が留学準備中である。また、招聘者はカブール大学教員、卒業生が中心であり、同大学とのネットワーク維持にも重要な役割を果たしている。

令和 2（2020）年度は新型コロナウイルス感染症の影響による受け入れ研修の中止を受け、2 月 19 日（金）にオンラインにて意見交換会を開催することとした。過去の研修参加者のうち、直近の平成 28（2016）年度から令和元（2019）年度に来日した研修員 7 名を招待し、6 名より参加の返事を受け取った。一名が当日所要で不参加となったため 5 名が参加し研修の効果や改善へのアドバイス、また、ネットワークの構築に向けて意見交換を行った。過去の本事業研修生との意見交換会開催は今回が初めてとなる。

（2）参加者

森 義仁 基幹研究員・自然科学系教授（グローバル協力センター員/研修コーディネーター）

小中铁雄 特任教授（グローバル協力センター 副センター長）

(3) 実施日時・開催方法

日時：2021 年 2 月 19 日（金）13：00 から 14：00（アフガニスタン時間）/
17：30 から 18：30（日本時間）

開催形式：Zoom によるオンライン開催

(4) 内容

研修員には、新型コロナウイルス感染症（以下新型コロナ感染症）など現在のアフガニスタンの状況、野々山短期研修がその後のキャリアに役立っているか、今後の研修に向けてのアドバイス、また、ネットワークの構築に向けて今後年 1、2 回のオンライン交流会の実施案等についての意見を聞いた。

参加者からは、本短期研修はアフガニスタンの女性教員・研究者にとり良いプログラムであり、継続して欲しいとの評価をいただいた。帰国後の効果として

研修の際に得た実験の技術（抽出）が勤務先の研究所での新型コロナ感染症に係る業務に特に役立っているとお話があった。

からは、研修後、更に学びたいと思い、JICA PEACE プログラムにチャレンジするきっかけになったことや 4 月には同 PEACE プログラム研修員として来日予定であるとの報告があった。

氏も大学での教員としてのキャリアを向上させるため、お茶の水女子大学大学院博士前期課程で学びたいと考えている。

氏からは、研修期間をもう少し長くしてほしいとの要望があった。

学術的な効果の他に、静岡県のレシャード医院を訪問しアフガニスタン人医師が日本で活躍していることを知り感銘を受けたことや、薬局や博物館などを訪問したこと、また、来日することにより日本の良さを知り文化に直接触れることが出来てよかったとのコメントをいただいた。

今後、野々山短期研修参加者による年 1 から 2 回程度のオンライン意見交換会の開催について聞いたところ、全員から実施して欲しいとの意見があった。

アフガニスタンでは新型コロナウイルス感染症の影響で雇用情勢が悪化していることや、タリバンとの和平協定の結果次第では女性が社会で働くことが難しくなることも考えられるため、意見交換だけでなく、インターンシップ、留学等の情報提供やオンラインワークショップ等の開催などの提案もあった。オンライン意見交換会についても、金曜日の午後（アフガニスタン時間 13 時）から開始することがよいということであり、次のミーティングについても積極参加の意向が示された。

2. アフガニスタン国未来への懸け橋・中核人材プロジェクト（国際協力機構（JICA）PEACE プロジェクト）

国際協力機構（JICA）は、アフガニスタンの持続的開発を支える中核人材の育成を目標として、2011 年から 2025 年の間、同国の行政官及び大学教員を日本国内の大学院修士課程等へ受け入れる「未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト（PEACE）」を実施している。

2020 年 10 月より 受け入れ予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響から 2021 年 4 月まで延期になっている。

同プロジェクトでは、研修員は日本での学位取得後、出身省庁に復職してアフガニスタンの復興を担う人材となることが期待されているため、PEACE 関係省庁の担当者が滞在中の研修員とコミュニケーションをとることが重要ということから、例年 9 月にアフガニスタン政府関係者を日本に招聘しカウンターパート招聘・モニタリングプログラムが開催されている。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、11 月 24 日（火）に「アフガニスタン女性研修員の復職と活躍支援について」をテーマにオンラインによる意見交換会が実施されお茶の水女子大学から、由良敬教授（基幹研究院自然科学系）とグローバル協力センターが参加した。プログラム冒頭、アフガニスタンの女性教育・研究者への支援に長年携わってきた経験を踏まえ、受け入れ教員である由良敬教授より、本学ならびにグローバル協力センターにおける女性研修者支援の歴史と実績、国際連携の実績についてのお話をいただき、後半は小グループに分かれ、アフガニスタン政府関係者と現在日本の修士課程で学んでいるアフガニスタンの女性研究員間で「アフガニスタンでの女性研究者の役割・今後への期待」について意見交換会があった。アフガニスタンで女性がリーダーとして活躍することが難しい中で専門性を持つことが

社会に貢献することにつながるという意見があり同プログラムの意義と今後への期待が語られた。



令和 2（2020）年度 PEACE プロジェクト現地政府関係者との意見交換会のプログラム説明と由良先生ご講義の様子

3. アフガニスタンへの絵本寄贈（野々山基金）

（1）概要

アフガニスタンをはじめとする開発途上国における女子教育に関する事業への支援を行うことを目的として平成 23（2011）年度に設置された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の活動として、同国で絵本・図書館事業を展開する公益社団法人シャンティ国際ボランティア会と協力し、平成 24（2012）年度から絵本の作成・印刷・配布を実施している。これまで、7 タイトル、ダリ語とパシュトゥ語で各 1,200 冊、合計 16,800 冊印刷し、カブール州とナンガハル州の子ども図書館・公共図書館・学校図書館を中心に配布している。今回は 8 タイトル目の絵本出版事業となる。

（2）背景と目的

内戦を経て復興に取り組むアフガニスタンにおいてはタリバン政権下において禁止されていた女子の就学を含めて教育の復興が国家再建の重要な課題である。しかし、識字率、就学率は依然として低い状況にあり、学校や教材の整備も十分に整備されていない。このような状況下で、アフガニスタンの児童のための図書の作成・寄付を実施することとし、同国において子どものための図書館事業を実施している公益社団法人シャンティ国際ボランティア会に子ども向け絵本の作成・配付を委託する。

（3）対象地域・事業受益者

アフガニスタン・イスラム共和国ナンガハル州、カブール州

学校図書室 160 校 261,219 名、公共図書館 12 館 600 名、子ども図書館 1 館 169 名、合計 261,988 名

（4）令和 2（2020）年度絵本作成状況

令和 2（2020）年度は「数をかぞえよう」という幼児向けの、動物で数を数えて学ぶ絵本を制作している。数字の 1 から 10 と現地語の対応文字の両方を学べる内容となっている。新型コロナウイルス感染症の影響から、絵本制作に際し調整をメールベースで行うなど、感染拡大防止を考慮しながら活動を進めているが、予定より後倒しのスケジ

ュールとなっている。現在完成画の作成が完了するところであり、今後は同完了後、教育省の許可を得て印刷版を作成し、3 月末までの印刷完了を目指している状況である。図書館配付は 4 月以降の予定である。



2020 年度出版絵本「数をかぞえよう」表紙。幼児でも読みやすい A4 よりも小さいサイズでの印刷・製本の工夫が凝らされている。

(5) 令和元（2019）年度絵本の活用状況

昨年度、本学の支援で作成した絵本『恩返し/Pay Back』はこれまで出版した絵本から子どもたちに人気の絵本を選出し、新たなストーリーとして出版されたもの。池で溺れそうになって鳩に助けてもらった蟻が、漁師に撃たれそうになった鳩を助けるイソップ童話に似たお話。絵本作成にあたり、新しい画家、編集者にも作成プロセスに加わり、子どもたちが多様な画風や構成のお話に触れられる機会の増加も期待される。

(参考)

○これまでの野々山基金支援による作成絵本（ダリ後、パシュトゥ語各 1200 冊を配付）

2013	孤児の女の子
2014	亀とイチジクの木
2015	クジャクの羽
2016	幸せの半分は健康から
2017	パンダの冒険
2018	ハミダと栄養三兄妹
2019	恩返し/Pay Back

○2019 年度の絵本の活用状況：図書館・児童数

配布対象小学校・図書館	校・館数	児童数
小学校図書館	160 校	261,219 名（登録児童数）
公共図書館	12 館	600 名（1 日あたりの利用者数）
SVA 運営図書館	1 館	168 名（1 日あたりの利用者数）

乳幼児ケアと就学前教育（国際協力機構（JICA）課題別研修）

（１）概要

お茶の水女子大学では、JICA の委託を受け、「中西部アフリカ幼児教育研修」を平成 18（2006）年度から平成 29（2017）年度にかけて、12 年間実施してきた。平成 30（2018）年度からは、それまでの成果を継続する形で、対象地域を拡大し、「乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」を実施している（平成 30（2018）～令和 2（2020）年度の 3 年間実施予定）。今回の研修は、平成 30（2018）～令和 2（2020）年度の 3 年計画の 3 年目に当たるものである。

（２）背景と目的

途上国においては財源不足と政府関係者の ECCE（early childhood care and education: 乳幼児ケアと就学前教育）に関する意識の低さ等から、国家政策として ECCE 分野を専門とする人材が不足している状況がある。こうした状況を踏まえ、特に ECCE へのアクセスや質の改善が急務の課題となっているアフリカ・中東地域を対象に ECCE の整備・普及を図るため、同分野の政策レベルでの人材育成と能力向上を目的とし、本研修を実施する。

（３）対象国・人数

6 か国・計 11 名

カメルーン（2 名）、イラク（2 名）、レバノン（2 名）、マダガスカル（3 名）、シエラレオネ（1 名）、ルワンダ（1 名）

（４）研修員

中央の教育省、子ども省など、政策レベルで幼児教育や就学前教育を監督している省庁の担当課長レベル。

（５）研修期間

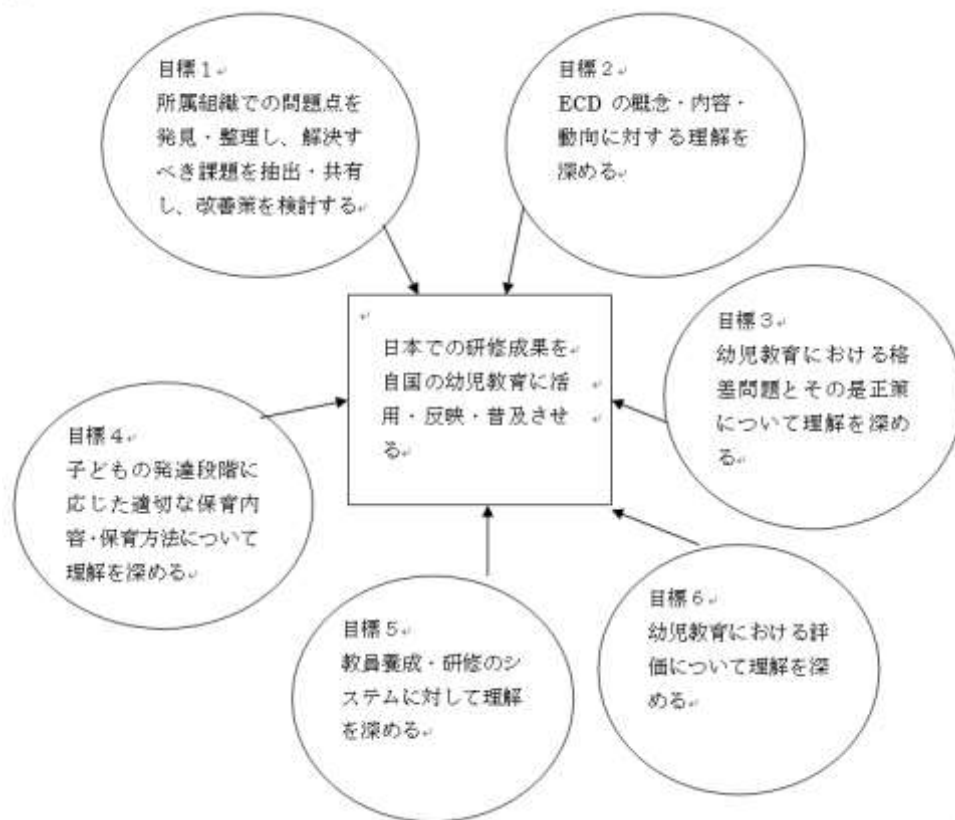
2021 年 2 月 1 日（月）～2 月 26 日（金）

（６）研修形態：オンライン研修（Zoom）



（７）プログラム概要

以下の 6 つの単元目標に沿って、講義、研修員プレゼンテーションを実施した。研修員の理解を確実なものにするため、2 回の振り返り（シェアリングタイム）も実施した。



(8) 日程表

日付	時刻		形態	研修内容	インセプション レポート発表	講師又は見学先担当者等	
						氏名(敬称略)	所属先
1/25(月)	17:30	19:00		事前接続確認・オリエンテーション		橋本裕保	JICA東京
2/1(月)	18:00	18:30		開講式			
	18:30	20:00	講義	論理的思考の芽生え		坪川紅美	JICA海外協力隊 幼児教育技術顧問 お茶の水女子大学
2/4(木)	18:00	19:30	講義	日本の幼児教育1：教育制度、カリキュラムなど		浜野隆	お茶の水女子大学
	19:30	20:00	発表	インセプションレポート発表(2名)	マダガスカル	研修員	
2/8(月)	18:00	19:30	講義	日本の幼児教育2：教員養成、幼児教育の質など		浜野隆	お茶の水女子大学
	19:30	20:00	発表	インセプションレポート発表(2名)	イラク	研修員	
2/10(水)	18:00	18:30	発表	インセプションレポート発表(2名)	カメルーン	研修員	
	18:30	20:00	講義	幼児教育における評価		松本聡子	お茶の水女子大学
2/12(金)	18:00	19:30	講義	主体性を育む保育・環境構成について		太田雅子	聖隷クリストファー大学
	19:30	19:45	発表	インセプションレポート(1名)	シエラレオネ	研修員	
	19:45	20:00	討議	振り返り1(シェアリングタイム)		研修員	
2/18(木)	18:00	19:30	講義	保育内容と保育計画		松島のリ子	お茶の水女子大学
	19:30	20:00	発表	インセプションレポート発表(2名)	レバノン	研修員	
2/19(金)	18:00	19:30	講義	子ども中心の保育		内田伸子	IPU・環太平洋大学教授、お茶の水女子大学 名誉教授
	19:30	20:00	発表	インセプションレポート発表(2名)	ルワンダ	研修員	
2/24(水)	18:00	19:30	講義	ECDの理念と国際動向		三輪千明	広島大学
	19:30	20:00	発表	振り返り2(シェアリングタイム)		研修員	
2/26(金)	18:00	18:20		研修総括		浜野隆	お茶の水女子大学
	18:20	19:10	発表	発表(研修の感想、今後の活動計画)		研修員	
	19:10	19:20		評価会		橋本裕保	JICA東京
	19:20	19:50		閉講式			

5. 社団法人日本アフガニスタン協会から附属中学校へのサッカーボール寄贈

12月25日（金）、社団法人日本アフガニスタン協会（以下日本アフガニスタン協会）から本学附属中学校へ、アフガニスタン製サッカーボール 7 個の寄贈があった。サッカーボールはアフガニスタンの女性が手縫いで製作したもので、日本アフガニスタン協会では、サッカーボールを作成している現地の女性団体を励ます観点からサッカーボールを購入し、日本の関係団体に寄贈している。本学は、長年アフガニスタンの女性支援を実施していることから、当センターに打診があり、今次寄贈に至った。附属中学校池田校長、小泉副校長より、サッカーボールについて放送朝礼などで紹介し、代表で生徒会長に手渡しすることや体育の授業や部活動で活用するにあたり、アフガニスタンはどんな国かを紹介するなど思いを馳せる機会としたいとお話をいただいた。その後、附属中学校ではコロナ禍ということもあり、サッカー部の活動もなく、サッカーボールを使用する体育の授業もまだ先だが、昼休みにサッカーをして体を動かす際に積極的に活用してくれている。グラウンドが白っぽい砂ということもあり、「黄色が目立って見やすい」と生徒からも好評であるとお話をいただいた。また、附属中学校体育科教諭から「手触りもよく蹴った際の感触も柔らかくて、初心者の生徒にも非常に扱いやすいサッカーボールだと感じます」との感想をいただいた。附属中学校では、このボールとの出会いを一つの契機として、生徒たちがさらに広い視野を持ってくれたらと考えている。



日本アフガニスタン協会松浪理事（一列目中央）と室伏学長（一列目右）、佐々木副学長（一列目左）、池田附属中学校校長と小中副センター長との記念写真



日本アフガニスタン協会松浪理事よりサッカーボール寄贈を通してのアフガニスタンの女性支援についてお話を伺う



昼休みにサッカーボールでプレイする附属中学生

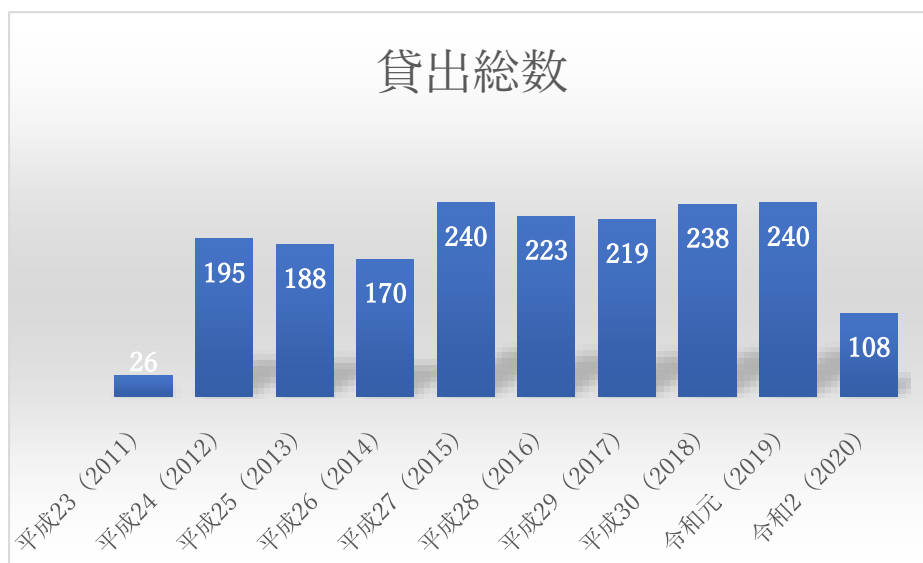
V. その他

V. その他

1. グローバル協力センター図書室利用状況

グローバル協力センター図書室は平成 23 年 (2011) 年から開室しており、国際協力、平和構築、開発に関する教育・研究、学習に必要な図書およびその他の資料を収集・管理し、お茶の水女子大学学部生、大学院生、附属高校性、卒業生および教職員の利用に供するように務めている。2021 年 3 月末時点で、1,827 冊蔵書している。開室時間は祝祭日、夏季・冬季一斉休業日を除く月曜日から金曜日の 9 時から 16 時としているが、センタースタッフが対応可能な場合は時間外でも利用が可能である。貸出方法はセンターに利用登録をし、直接貸出、返却をする。年間開室日は、昨年度は 235 日であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症（以下新型コロナ感染症）の影響を受け 182 日であった。今年度の利用者は学部生 10 名、大学院生 6 名、教職員 3 名で、内、11 名は新規利用登録者。108 冊の貸出があり、平成 23 (2011) 年のセンター図書室開室以来延べ 1,847 冊の貸出を行ったこととなる（2020 年 3 月末時点；図 1）

利用者は、附属図書館の蔵書検索 OPAC で資料を検索し来室している。センター図書室の貸出期間は学部生でも 4 週間（貸出予約がない場合でも貸出延長可）であるが、今年度は新型コロナ感染症の影響を受け、申し出を受け、柔軟に返却期間を延長した他、返却ボックスをセンター室前に設置し、利用者の都合の良い時間に返却ができるよう工夫した。2021 年 3 月末時点で 1 年以上の長期未返却の図서가 4 冊あり内 1 冊は 3 年以上不明本のため除却となった。今年度、新規に貸出した図書については、新型コロナ感染症の影響を受け、既に数冊貸出延長の申し出があった。貸出本については、台帳と Access で管理し、利用者にはメールで返却のリマインドを行い長期未返却の利用者が生じないように注意を払っている。



2. 情報発信

(1) ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約 40 件の情報を掲載している。

毎年、学内外を対象とした様々なイベントを企画、実施していたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、グローバル協力センターが主催する前期開催予定のイベント等はすべて中止または延期となった。後期には大学閉鎖が徐々に緩和され、対面授業も一部実施可能となったため、12 月から 1 月にかけて SDGs セミナーを 3 回実施するなどしたが、1 月 8 日に緊急事態宣言が再度発出され、新たなイベントの企画・実施を見合わせるようになった。

このような状況から、今年度のホームページ掲載情報は 17 件にとどまっている。なお、掲載した活動報告は「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生、センタースタッフが執筆した。

また、上記活動報告のうち 7 件は英訳して英語版ホームページに掲載し、対外（国内及び国外）的な情報発信に努めた。

(2) メーリングリストによる情報発信

令和 2（2020）年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は約 150 名（2021 年 3 月現在）となり、学内外（国際機関、JICA、NGO 等）のイベント情報（研修、ウェビナー、インターン募集等）や「共に生きる」スタディグループの活動情報を発信し、学内外の講演会やイベント等への関心を高めるきっかけを作った。

(3) 大学メールマガジン、公式 SNS、学生ポータルサイトによる情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）や学内電子掲示板（Digital Signage）、学生ポータルサイト、Twitter を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページや Facebook を利用するなど、よりタイムリーに、より広範囲にセンターの活動や取り組みを情報発信することに努めた。

(4) パンフレットによる情報発信

これまでセンターパンフレットを編集・印刷して、大学院オープンキャンパス（4 月開催）や学部オープンキャンパス（7 月開催）に来学された方々に広く配布して、センターの活動や取り組みを情報発信してきた。しかしながら新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、令和 3（2021）年度はいずれもオンラインでの開催が決定されているところ今年度のパンフレットは電子版（PDF）のみ作成し、センターホームページに掲載するとともに必要に応じて印刷する対応で効率化を図る予定である。

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—
令和2（2020）年度 実施報告書

2021 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax : 03-5978-5546

Email : info-cwed@cc.ocha.ac.jp
